

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00417

研究課題名(和文) 第一次世界大戦終結100周年のために：21世紀英語文学と他者の記憶 / 記憶の他者

研究課題名(英文) For the Centenary of the End of the First World War: 21st-Century English Literature and the Memory of the Other / The Other of Memory

研究代表者

霜鳥 慶邦 (Shimotori, Yoshikuni)

大阪大学・大学院人文学研究科(言語文化学専攻)・准教授

研究者番号：10400582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第一次世界大戦100周年をめぐる英語圏諸国の文学・文化・政治を、国境横断的に分析し、大戦100周年の歴史的意義と課題を明らかにすることに取り組んだ。特に、従来の大戦の記憶において周縁化・忘却されてきた「他者」的存在(具体的には、中国人労働者、インド兵、アラブ兵、カナダ先住民、アフリカ兵、女性など)に注目し、各国の大戦100周年の公式の言説には収まりきれない、大戦の記憶の多様性と複雑性を明らかにし、大戦の記憶研究の新たな地平の可能性を開拓した。その最大の成果が、単著書『百年の記憶と未来への松明[トーチ] 二十一世紀英語圏文学・文化と第一次世界大戦の記憶』(松柏社、2020年)である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最大の成果が、単著書『百年の記憶と未来への松明[トーチ] 二十一世紀英語圏文学・文化と第一次世界大戦の記憶』(松柏社、2020年)である。本書は、大戦100周年をめぐる世界的動向を踏まえた視座から、21世紀英語圏文学・文化における大戦の記憶の諸相を明らかにしている。また本書には、現地のミュージアム、戦跡、墓地、記念碑、式典などの様々な写真が豊富に掲載されている。本書は、これまでの大戦の記憶研究を文学・文化研究の視座から総括すると同時に、大戦の記憶研究を、大戦100周年以後の新たなステージへと導くことに大いに貢献する、学術的意義と独自性に富む一冊であると自負している。

研究成果の概要(英文)：This study analysed the literature, culture and politics of English-speaking countries in relation to the centenary of the First World War and identified the historical significance and challenges of the WWI centenary. It paid special attention to 'other' figures (specifically, Chinese labourers, Indian soldiers, Arab soldiers, First Nations, African soldiers, women, etc.) who have been marginalised and forgotten in the traditional memory of the First World War. Revealing the diversity and complexity of the memory of the war which cannot be contained in each country's official discourse of the WWI centenary, this study has opened up the possibility of new horizons in war memory studies. The greatest achievement of this research is *100-Year Memory and the Torch for the Future: 21st-Century English Literature/Culture and the Memory of the First World War* (Shohakusha, 2020).

研究分野：イギリス文学

キーワード：イギリス文学 英語圏文学 第一次世界大戦 記憶 他者

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

私は、2006年度以降、科研費の支援を受けながら、第一次世界大戦100周年にねらいを定めて研究を継続・発展させてきた。具体的には、大戦100周年をめぐる世界的動向に注目しながら、英語圏の現代文学・文化を中心に、その他の地域をも射程に入れて(イギリス、カナダ、オーストラリア、アイルランド、ベルギー、フランス、トルコ、中国、アフリカ諸国など)、大戦の記憶の諸相について研究してきた。本研究は、大戦100周年を通過した視座から、大戦100周年の意義と課題を検証し、これまでの自身の研究を総括すると同時に、今後の大戦の記憶研究の新たな地平を開拓するものである。

本研究の背景には、次の二つの問いがある。まず、大戦100周年とは何だったのか、という問題である。大戦100周年を契機に、大戦の歴史的意義が根本的に再考された。次は、大戦100周年そのものの歴史的評価が緊急に取り組むべき重要な課題となるはずだ。特に、各国の公式の言説を検証することで、大戦100周年がどのような成果をもたらし、どのような課題を孕んでいるのかを明らかにすることが重要になる。もう一つの問いは、各国の公式の言説に批判的に介入するために、21世紀大戦文学がどのような想像的・創造的可能性を提示し得るのか、という問題である。特に、従来の大戦の記憶において周縁化・忘却されてきた「他者」的存在をテーマとする21世紀英語文学作品を集中的に分析することで、各国の公式の言説とは異なる大戦の記憶のあり方の可能性を追究したい。

2. 研究の目的

第一次世界大戦100周年(2014-2018年)を契機に、大戦に関与した国々では、記念式典の開催、文学・芸術作品の発表、新たな記念碑の建立、国際交流、大戦研究の活発化など、アカデミズムの内外で様々な動きが展開された。大戦100周年が、大戦の記憶における重要な転換期となったことは間違いない。本研究は、大戦100周年という決定的瞬間をめぐる英語圏諸国の動向を国境横断的に分析し、大戦100周年の歴史的意義と課題を明らかにすることを第一の目的とする。この目的と関連して、第二の、より重要な目的として、従来の大戦の記憶において周縁化・忘却されてきた他者的存在(具体的には、中国人労働者、アルメニア人、インド兵、アラブ兵、カナダ先住民、オーストラリア先住民、ベルギー一般国民など)をテーマとする21世紀英語文学を比較分析することで、各国の大戦100周年の公式の言説には収まりきらない、大戦の記憶の多様性と複雑さを明らかにし、大戦の記憶の新たな地平の可能性を開拓することを目指す。具体的には、以下の6つが主な目的となる。

(1) 中国人労働者の記憶をめぐる文学・文化現象

第一次世界大戦時の中国人労働者の存在は、欧米諸国のみならず、中国国内でも長らく忘却されてきた。だが大戦100周年を契機に、徐々に存在感を増している。特に、2017年の諸事象ロンドンの休戦記念日での戦後初の中国人労働者への公式の追悼、ベルギーとフランスでの中国人労働者記念碑の建立、Clive Harveyによる小説*Yang's War: A Forgotten Chinese Hero of World War One*の発表などは、中国人労働者の記憶の重要な転換点と言える。本研究は、特に2017年の諸事象に注目しながら、中国人労働者の記憶をめぐる近年の文学・文化的動向を検証することで、その意義を明らかにする。

(2) アルメニア人大虐殺の記憶をめぐる文学的・芸術的想像力と倫理

オスマン帝国による第一次世界大戦時のアルメニア人大虐殺は、いまだに記憶の和解へと至っていない未解決問題である。大戦100周年の期間に、この歴史的事件をテーマにした作品が複数発表された。アイルランドの小説家Martine Maddenによる*Anyush*(2014年)、トルコ系ドイツ人映画監督Faith Akinによる*The Cut*(2014年)、北アイルランドの映画監督Terry Georgeによる*The Promise*(2017年)だ。また、2004年に公開された、アルメニア系カナダ人監督Atom Egoyanによる*Ararat*も、重要な考察対象となる。これらの小説と映画を、近年のジェノサイド研究の成果を踏まえながら、そしてアルメニア人虐殺をめぐる今日的論争を視野に入れながら比較考察することで、現代の文学と芸術による歴史的悲劇の想起の技巧・倫理・意義を明らかにする。

(3) インド、パキスタンの視座からの大戦の記憶の再想像

パキスタン出身イギリス在住の女性作家Kamila Shamsieの2014年の小説*A God in Every Stone*について考察する。ペシャーワル、オスマン帝国、西部戦線、ロンドンといった複数の舞台の物語を巧みに織り上げる技巧によって、この小説が、アジア的視座から大戦をどのように再想像し、西洋的大戦イメージに批判的・創造的に介入し得るのかといった点を中心に、この小説のもつポストコロニアル的可能性と意義を明らかにする。

(4) オーストラリア先住民の大戦体験と記憶の行方

第一次世界大戦のオーストラリア・ニュージーランド軍におよそ1000人いたと推定されてい

るオーストラリア先住民は、オーストラリアの大戦の集合的記憶から、かなりの程度忘却されている。このような状況の中、2015年に上演された Tom Wright 脚本・Wesley Enoch 監督の演劇 *Black Diggers* は、オーストラリア先住民の戦争体験に光を当てた注目すべき作品である。この作品を、大戦当時の先住民の置かれた状況、今日の先住民の運動、Anzac 神話のイデオロギー性などに関連付けながら分析することで、オーストラリアの大戦の記憶にこの作品が与え得る批判的・創造的効果と意義を明らかにする。

(5) カナダ先住民の大戦体験と記憶の行方

カナダの作家 Joseph Boyden の *Three Day Road* (2005年)は、カナダ先住民の戦争体験をテーマとする小説である。私は過去にこの小説について論文を発表した。本研究では、この小説を、Boyden がその後発表した作品、他のカナダ人作家の作品、近年のカナダ先住民をめぐる文化的・政治的動向と関連付けながら、より大局的な視座から再考することで、カナダの大戦の記憶における先住民の問題について、多角的・包括的に考察する。

(6) ベルギー文学の英訳の意義と効果

フラマン語から英語に翻訳され高い評価を得た二編のベルギー大戦小説 Erwin Mortier, *While the Gods Were Sleeping* (2008年)と Stefan Hertmans, *War and Turpentine* (2013年) の比較分析を行う。従来、ベルギー側の視座からの大戦の記憶は、言語的障壁のために、英語圏において本格的に論じられることはなかった。本研究では、これら二編のベルギー小説が英語文学に加わり、ベルギーが表象される側から表象する側に移ることで、英語圏の大戦の記憶にどのような影響を与え得るのか、その可能性と意義を明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 特に第一次世界大戦期とその後の記憶における「他者」をテーマにした小説、詩、回想録、映画作品、音楽作品などを入手し比較分析する。特定の国にこだわらずに、英語圏諸国を幅広く射程に収める。
- (2) 第一次世界大戦研究の最新の文献資料を入手し、研究の動向と課題を把握する。特に従来のナショナルな枠での大戦理解を超えた、ポストコロナルな視座、トランスナショナルな視座、さらにはグローバルな視座からの研究の成果を最大限に吸収する。
- (3) 第一次世界大戦 100 周年に関する、世界諸地域のリアルタイムの政治的・社会的・文化的 動向に関する情報を、文献やインターネットによって入手・整理し、各国における大戦 100 周年の意義と課題を検証する。
- (4) 英語圏諸国を中心に、大戦に関わった国の戦跡、ミュージアム、記念碑、墓地、式典などを中心に現地調査を行い、第一次世界大戦に関する一次資料と大戦 100 周年をめぐる文化状況に関する資料を入手し、研究の実証性を強化する。

4. 研究成果

- (1) 第一次世界大戦の記憶において長年にわたって周縁化・忘却されてきた中国人労働者やアフリカ兵の存在に対する理解が、大戦 100 周年を契機に劇的に深まっていく様子を、文学作品、音楽作品、新たな記念碑の建立、墓地、式典、ミュージアムなどを対象に考察し、大戦の記憶におけるポストコロナル的成果を探究し、大戦の記憶のグローバル化の諸相を明らかにした。
- (2) 過去に一度論じた Joseph Boyden の *Three Day Road* を、Boyden の他の文学作品、他のカナダ人作家の作品、カナダ先住民の癒しと和解への運動（特にカナダ真実和解委員会の活動）、カナダ史といったコンテクストにおいて改めて考察することで、Boyden 文学を、広い文脈において再配置・再考し、その相対的位置付けと意義を明らかにした。
- (3) パキスタン出身イギリス在住の女性作家 Kamila Shamsie の *A God in Every Stone* における「忠誠」のテーマについて、次のトピックとの関連で分析した。パキスタンにルーツを持つ英元閣僚 Sayeeda Warsi をめぐる政治的現象、9/11 テロ事件以後のイスラモフォビア、英領インドの大戦体験、Khan Abdul Gaffar Khan の主導による反英非暴力的抵抗の歴史、ペシャーワルにおける仏教の歴史など。この分析作業を通して、この小説が、イギリスの多文化主義を賛美する大戦 100 周年の支配的言説に批判的に介入し、オルタナティヴな記憶のあり方を提示する可能性を明らかにした。
- (4) Ian McEwan の *Saturday* と *The Cockroach*、Ali Smith の *Autumn* を接続して読解することで、イギリスにおけるポスト 9/11 文学からプレグジット文学への軌跡の特徴を明らかにすると同時に、そこに第一次世界大戦の記憶がどのように絡んでいるのかを明らかにした。

(5) 上記の(1)～(4)の成果はすべて、単著書『百年の記憶と未来への松明[トーチ] 二十一世紀英語圏文学・文化と第一次世界大戦の記憶』(松柏社、2020年)の中に収録された。本書は、英語圏諸国の現代文学・文化を考察対象とし、国境横断的なグローバルな視座から、大戦100周年の意義と課題を検証し、大戦の記憶研究を、大戦100周年以後の新たなステージへと導く、学術的独自性と意義に富む一冊であると自負している。本書によって、福原賞、咲耶出版大賞特別賞を受賞した。

(6) Ali Smith の四季四部作を考察対象として、戦争の記憶、ブレグジット、難民危機、新型コロナウイルス、気候変動といったテーマが複雑に絡まり合う様子について分析し、「コロナ禍の時代を生きる命と想像力 アリ・スミス『夏』における「終わりの風景」と希望の可能性」という題目の論考を執筆した。論考は、『終わりの風景 英語圏文学における終末表象』(春風社、2022年)に掲載され出版された。

(7) 第一次世界大戦期に執筆された D. H. Lawrence の *The Rainbow* について、論文「虹の向こう側の「世界」 D・H・ロレンス『虹』と帝国主義」(『言語文化研究』第49巻、2023年3月)としてまとめた。この論文は、21世紀文学を対象とする本研究課題の当初の研究計画には含まれていなかったが、第一次世界大戦期のイギリスの帝国主義、植民地統治、人種的他者といったテーマに取り組む過程で実現した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 霜鳥慶邦	4. 巻 49
2. 論文標題 「虹の向こう側の「世界」 D・H・ロレンス『虹』と帝国主義」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 71～91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/90946	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 霜鳥慶邦
2. 発表標題 「'I change, but I cannot die.': Ali Smith四季四部作における「ナチスの時代」 / 「Trumpの時代」の変身譚」（シンポジウム「第二次世界大戦と英語圏文学」）
3. 学会等名 日本英文学会第93回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 霜鳥慶邦
2. 発表標題 「『土曜日』の気分、『秋』の気配、「虫」の知らせ ポスト9/11文学からプレグジット文学への軌跡」
3. 学会等名 「世界的内戦時代の英文学研究」（科研費基盤(C)「現代イギリス小説における世界的内戦表象」（代表：板倉巖一郎）主催研究会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 霜鳥慶邦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 松柏社	5. 総ページ数 448
3. 書名 『百年の記憶と未来への松明[トーチ] 二十一世紀英語圏文学・文化と第一次世界大戦の記憶』	

1. 著者名 吉村宏一・吉田祐子・藤原知予・北崎契縁・小川享子（編訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松柏社	5. 総ページ数 750
3. 書名 『D. H. ロレンス書簡集 1919-1920』	

1. 著者名 辻和彦・平塚博子・岸野英美編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 240
3. 書名 『終わりの風景 英語圏文学における終末表象』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------